

主 題：動機は愛

聖書箇所：コリント人への手紙第一 8章1節－13節

今朝の聖書はコリント第一の手紙8章です。第三次宣教旅行に出かけたパウロは、エペソに立ち寄る前にコリント教会に宛てて手紙を送っています。そして彼がエペソ滞在中にコリント教会の問題について、また彼らの抱える質問を知ることになりました。そこでパウロはそれらの質問に答えるためにこの手紙を記しました。7章からそれらの質問に対するパウロの答えが記されていることをもう我々は既に学んできました。7：1、25のところには結婚についての質問が存在していたことを私たちに教えてくれ、それに対するパウロの答えを見ました。きょう私たちが見ていく8章の中には偶像に捧げた肉についての質問のパウロの答えが記されています。12章には霊的賜物について、15章には死人のよみがえりについて、そして16章にはエルサレム教会への献金についての質問があり、それに対してパウロは答えを与えています。

今朝私たちはこのコリント教会の二つ目の質問である偶像に捧げた肉についてのパウロのメッセージを一緒に学んでいきます。1節を見ると、まず「次に、偶像にささげた肉についてですが、」と記されています。パウロはこの質問を彼らから得ていたことをここで明らかにします。コリント教会の中にあって、偶像にささげた肉を食べてよいものなのかどうか、このことに関して一致が見られていませんでした。偶像にささげた肉を食べることに全く抵抗を感じていないクリスチャンたちが存在し、また偶像にささげた肉を食べることに抵抗を感じていたクリスチャンたちも存在していました。そこで彼らはどうしたらいいのかと彼に問いかけたのです。

#### A. 「肉を食べても良い理由」 1－6節

まずパウロは6節で肉を食べてもいいのだと教えます。

##### 1. 「知識の大切さ」 1節

そして彼はその理由を挙げています。続けて1節を見ると、「次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。」とあります。これを見ると、パウロは知識について話をしているということがわかります。ただ今お読みした1節のところは少しわかりにくいのです。「私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています」、ここを直訳するならば「実に偶像にささげた肉についてですが、私たちは皆知識を持っていることを知っています」となります。新改訳2017でも「次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。」とあります。要するにパウロはここでパウロ自身も含めて「知識を持っている」と言います。「私たちは」と書かれてあるのは、彼がそこに含まれていることを明らかにしています。この「知識を持っている」人たちというのは、信仰的に成長している者たち、また霊的に大人である者たちのことです。つまり彼らはこの偶像にささげた肉について一体何が神の前に正しくて神に喜ばれることなのか、その「知識を持っている」という話をするのです。

この後パウロはそのことを記すのですが、霊的に成長した人たちは、まず偶像についての正しい知識を持っていました。まことの神以外には神はいないのだと。同時に、偶像にささげた肉が汚れているかどうかという知識も持っていました。知識を持っている人間は、その肉は汚れていないから食べてもいいのだと言うのです。でも同時に教会の中には、こういった知識をまだ持っていないクリスチャンたちがいました。信仰の恵みにあずかったばかりのクリスチャンたちです。まだ信仰者として幼い者たちです。偶像にささげた肉を食してきた彼らにとって、これまで同様に肉を食べることは、神の前にふさわしくないことだと彼らは考えたのです。そこでパウロは、聖書に基づいた正しい知識を持つことだと言うのです。

#### ◎ 傲慢の恐ろしさ

そして、この知識を持っている霊的に成長した者たちには、その知識の持つ恐ろしさ、つまり傲慢の恐ろしさを教えていこうとするのです。みんなが知識を持つことは必要です。でも知識を持っている者たちが気をつけなければいけないのは、そうでない人たちに対する態度です。彼らを見下してしまうような態度をパウロは警告します。1節の後半に「しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。」とあります。知識のある人にとって大切なことは、そうでない人をどのように扱うかが大切なのだとパウロは言うのです。この「高ぶらせ」ということばは、「怒らせる」とか「虚栄心」、「うぬぼれ」という意味です。ですから自分の知識を自慢する人は人に対して傲慢になってしまう危険性があるということです。実際、これがコリント教会の問題だったのです。そしてもちろんこの問題はコリント教会にとどまることなく、どの時代にあっても、どの場所にあっても、私たちにとっても非常に注意をしなければ

いけないことなのは皆さんもよくご存じです。

パウロはまずそのことを記した後で、こう続きます。「愛は人の徳を建てます」と。つまり彼が言いたいのは、私たちキリスト者にとって大切なことは、群れの兄弟姉妹たちの霊的成長なのだということです。兄弟たちを愛する者は彼らの信仰にとって最善のことをいつも考えるはずだと。だからパウロは確かに知識は大切だけれども、それ以上に「愛」が重要だということを教えます。このコリント教会に存在していた問題はプライドだけではなく、実は「愛」においても問題を抱えていたのです。そこでパウロは13章でこの「愛」について教えようとするのです。ですから少なくともこういうことが言えます。「愛」の伴わない知識はその人のプライドを建て上げていく。「愛」の伴う知識は隣人の徳を、信仰を建て上げていくと。「愛」に基づいていない行動は神の前に正しくない。それがパウロの与えたメッセージでした。キリスト者として知識があるかどうかは知識の量によって測られるのではなく、隣人への行動によって証明されるものです。私たちが隣人に対してどのように接しているのか、どのように彼らのために生きているのか、そのことをパウロは教えようとするのです。何が神の前に正しいのかを知っていた彼ら。彼らはまだそれを悟っていない人たちに強要しようとしていたのです。ここに問題があったのです。

## 2. 「愛のない知識の危険」 2－3節

### 1) 完全な知識を持っていない

そこでこの2－3節を見ると、「愛」のない知識の問題、また危険についてパウロが教えています。「人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいいのです。」、つまり完全な知識をだれも持っていないということです。問題はそれを知っているかどうかです。そのことを自分自身が悟っているかどうかです。すべてを知っているのだという態度はその人の愚かさやその人の無知さを証明するものです。「まだ知らなければならない」と書いてあるのは、知る必要のあることの話です。つまり私たちが知らなければいけないことがまだたくさんあって、そのすべてをだれも知っていないということを言うのです。私たちはすべてのことを知っているように思うのですが、我々が知る必要のあることをまだ我々は全く知っていないということです。

それが証拠に、主の救いにあずかっていない人々は、さまざまな人間の疑問に対してその答えを知っていると言いながら、こういう質問に答えることができない。それは我々がどのようにして存在するようになったのか——。どうして私たちが今この世に存在しているのか——。我々は死んだ後どうなってしまうのか——。こういった大切なことに対しての本当の答えを知らない。もちろん彼らは何かを発言するでしょう。問題はそれが真実かどうかです。創造主の存在も、そのお方のことも知らない。何が一体神の前に正しく、完全なのかを知らない、人間ってそういうものだと言うのです。ソロモンは伝道者の書の8：17でこう言いました。「すべては神のみわざであることがわかった。人は日の下で行なわれるみわざを見きわめることはできない。人は労苦して捜し求めても、見いだすことはない。知恵ある者が知っていると思っても、見きわめることはできない。」と。彼は「見きわめることはできない」、「見いだすことはない」、「見きわめることはできない」と三度できないと繰り返しています。なぜかというと、私たち人間には絶対不可能なことだからです。神のなさろうとしておられることすべてを知ることはないし、もっと言えば我々は神ご自身を完璧に知ることはないので。パウロもローマ11：33で「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」と、同じことを繰り返しています。我々は知っていると思いながら、知らなければならないこと、知る必要のあることを知っていない。そのような存在だと言うのです。こうして、自分は知恵ある者だと高ぶっている者たちに対して警告を発するのです。

### 2) 愛はキリスト者の特徴

そしてその後、「愛」について語っています。3節「しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。」と。「神に知られている」人、つまり救いにあずかっている者たちです。神がその人のことを個人的に知っているのです。もちろん神は全知ですからすべてのことを知っておられる。でも個人的なつながりがそこにあるという話です。パウロが言うのは、人が神を愛するというのは、その人が神に知られているからだ。つまり救いにあずかっている人の特徴は神を愛する者だと。神を愛する者たちというのは当然兄弟姉妹たちを愛する者たちだと。ちょうどヨハネがⅠヨハネ5：1で「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」と言ったように。「生んでくださった」、つまり救ってくださった神を愛する者はだれでもその神によって生まれた兄弟姉妹たちを愛すると。

パウロはいま一度ここで神を愛し、隣人を愛すること、兄弟姉妹を愛すること、まさにそれが救いにあずかった者たちの特徴だと言うのです。だからまず最初にパウロが言いたかったことは、この救いにあずかっている、霊的だという人たちは確かに聖書が何を教えているかを知っていましたが、それをま

だ理解していない人たちに対して配慮が、「愛」が足らなかったということです。ですからパウロは信仰において強い人というのは、弱い信仰者の成長を助ける責任があることを教えます。ローマ15：1－3に「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。」、今ちょうど言っていることをパウロはローマ15章で教えたのです。力ある者たち、霊的な者たちははそうでない者たちの弱さをになうべきだと。自分を喜ばせるべきではない。我々は「ひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となる」ことをすることだと。まさにコリントの教会に送ったメッセージと同じことをパウロはローマ書の中にも記しています。ですから「愛」というのはクリスチャンたちの特徴なのだと。

### 3. 「偶像と神」 4－5節

それを語った後、パウロは4－6節でこの偶像とまことの神についての話をします。

#### 1) 実在しない偶像 4－5節

まず4－5節を見てください。彼は実存しない偶像についての話をします。4節「そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることについてですが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。」とあります。パウロは再び話を偶像にささげた肉を食べることに戻しています。そして人々が崇拝している偶像について教えをなすのです。世の偶像の神というのは実際に存在はしていないと。確かに神と名のつく存在が多数あります。この日本にもさまざまな偶像が存在しています。しかしそれらは神ではない。崇拝の対象となる神社の本殿や神殿の中においても、お寺の本堂の中にも神はおられない。神というお方は唯一のお方であり、唯一の神はこの方以外には存在しないのだと4節で教えます。

そして5節にこう続きます。「なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、」と、実存しない偶像のことを続けて教えます。5節にこのように記したのは、神々と呼ばれるもの、崇拝の対象となっているものが確かにたくさん存在するということをパウロは知っているのです。でもそれらは神ではないとパウロは繰り返します。確かに私たちの周りにも神と名のつくものがたくさん存在しています。でも信仰者である皆さんがご存じであるように、それらすべての背後に存在しているのは神ではなくてサタン自身です。だからそういう偶像が結局何をしているかというと、我々をお造りになった唯一まことの神から我々を遠ざけようとするのです。それは、サタン自身が望んでいることです。イザヤ書14：13－14にサタン自身がこのように言ったという箇所があります。「あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』」と。注目いただきたいのは「いと高き方のようになろう」というところです。つまり被造物であるサタン自身が創造主である神のようになろうとしたのです。ですから神のように振る舞ってはいるのです。でも神と呼ぶにふさわしいお方はただひとりだけだ、その方以外はすべて神ではないとパウロは言います。こうして偶像というものがどういう存在なのかということについて教えています。

#### 2) 存在される神 6節

それを教えた上で6節、今度は実際に存在されている唯一まことの神について教えます。6節「私たちに、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」と記されています。ここでパウロはまこと唯一の神について教えるのですが、この「父なる唯一の神」と「唯一の主なるイエス・キリスト」が全く同等に並べられている。この「父なる唯一の神」は、「すべてのものはこの神から出て」いる、すべてのものをお造りになったお方であり、イエスはというと「すべてのものはこの主によって存在し」、主イエス・キリストに造られたのだと。私たちはこの神のために存在している。つまり被造物である私たちはこの創造主なる神のために生きているのです。それが創造主によって造られた私たちの存在の理由であり、私たちが生きている目的です。イエス様に対しても「私たちもこの主によって存在するのです」と、同じことが言われています。我々もイエス様のために生きている。なぜならこの方が創造主であり、この方がまことの神だからです。ですからこうしてパウロは父なる神と主イエス・キリストが本質的に同じことを明らかにするのです。

皆さんもよくご存じの申命記6：4でモーセは「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」と言いました。みことばは私たちにまことの神様とはどのようなお方かを教えてくれます。父なる神がいて、子なる神がいて、聖霊なる神がおられる。そのただひとりの唯一のお方であると。ここでいま一度パウロはそのことを私たちに教えます。父なる神と主イエス・キリストが唯一の神であるのだと。そしてこれが聖書の教える唯一の神であり、私たちの神なのだと。すべてのものをお

造りになり、そしてすべての造られたものがこの方のために生きようとする。私たちの周りに存在する神々と名のつくものを見ても、はっきり言えることは彼らは創造主ではありません。パウロが言うようにその方はただおひとりだけだと。その主によって救われた私たち、この主に心からの感謝を捧げたいものです。

## **B. 「食べない理由」 7-13節**

こうして偶像とまことの神について話した後、7-13節まで食べない理由について話すのです。パウロは肉を食べてもいいと言います。なぜかというといふ偶像の神が存在しないからだ。ですからこの後にもその話が少し出てきますが、彼が最初に言いたかったことは、食べて大丈夫なのだと。ある人々は食べることによってその悪霊を宿してしまうのではないかと恐れていました。パウロはそんな心配はないということを教えながら、今度は食べない理由について7節のところから教えていきます。

### **1. 「知識の乏しい人の存在」 7節**

7節「しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。」、知識においてまだ乏しい人たちが存在していることを教えます。今話してきたこの知識をまだ得ていない者たちがいる。信仰を持ったばかりの人、まだ霊的に成熟していない人たちだと。彼らはまだ聖書の正しい知識というものを得ていないから聖書の教えに基づいて正しい判断をすることができないでいる。ある人たちは今まで偶像になじんできたため、偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのだと。つまりこれまで偶像を崇拝し、また偶像の宮でいけにえをささげた時に、そこで多くの人たちが食事をしたのです。また偶像にささげたその肉を販売している市場で彼らはそういう肉を買ってそれを食べていたのです。でも信仰に至ったら、救いにあずかった者たちは今までと同じことをしてもいいのかと戸惑うのです。多くの人たちは今までと同じことをすることに対して困難を覚えたのです。周りの信仰の先輩たちは肉を食べてもそれは罪ではない、それは偶像礼拝に値しないのだと言います。そのように言われてもこういう人々はその肉を食べることが神の前に罪を犯しているという罪悪感から完全に自分自身を克服することができなかった。彼らは常にそういう罪悪感に苛まれ、その罪悪感に勝利することができなかった。

パウロがここで「彼らのそのように弱い良心が汚れるのです。」と記したのは、まずそういう人々が教会の中に存在していたことをパウロ自身が知っていたからです。ではこの「弱い良心が汚れる」というのはどういうことかです。まずこの「弱い」という形容詞は「霊的に弱い」という意味です。「汚れる」というのは「冒瀆」とか「何かを墮落させる」という意味です。この「弱い良心が汚れる」というのは、偶像に捧げた肉を食べることによって、彼らの良心がその行為は間違っている、あなたは罪を犯している、あなたはその行為によって神を冒瀆しているのだという責めを感じたのです。パウロはそのことを言っているのです。今まで偶像の肉を平気で食べてきて、救いにあずかった者たちは、たとえ周りのクリスチャンたちが大丈夫なのだと言っても彼らの中には罪悪感があつたのです。ですからその肉を言われるように食べた時に、彼らの良心がお前はその行為によって神を冒瀆しているのだと、この良心の責めから逃れることはできなかったのです。

### **2. 「愛に基づいた行動」 8-13節**

#### **1) 食への自由さ 8節**

パウロはそのことを告げた後でこんなことを言います。8-13節までですが、「愛」に基づいた行動の話をするのですが、8節を見ると、我々は食に対して自由があると言います。「しかし、私たちが神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。」と。パウロは食べ物について我々は自由を持っていると言うのです。食べ物ならばすべてのものを食べていいと言うのです。食べ物と我々の信仰の成長とは無関係だと言っているのです。だから彼は「私たちが神に近づけるのは食物ではありません」と。この「近づける」ということばは「近くに置く」とか「用意する」という意味とともに「交わり」とか「親密さをもたらす」という意味です。つまり食べ物によって神様との交わりや親密さをもたらすようなことにはならないのだという話です。だからこういうものさえ食べていたら私は神様とより親しい関係を持つことができるとだれかが思っているとするなら、パウロはそんなことはありませんと言うのです。「食べなくても損にはならないし、食べても益には」ならない。成長とは無関係のものなのだというのです。

#### **2) 愛の実践：つまずきとならない 9-13節**

そしてその上で、「愛」の実践についてパウロは教えます。「ただ、あなたがたのこの権利——何を食べてもいいという自由の権利——が「弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。」と。確かにひとりひとりその権利をいただいているけれども、よく注意しなければいけない。なぜならば、既に見てきたように、それを食べることによってだれかにつまずきをもたらしてしまう危険があるからだ。確実に言えることは、教会の中である人々は、確実に何を食べても構わないのだと言って何でも

食べていたのでしょう。その群れの中に偶像にささげた肉に関しては躊躇を覚えている人たちがいるにもかかわらず、何をしても構わないのだと、彼らのことを全く配慮しないでそういう行為に至っている者たちがいたろうし、また彼らはそういうことを周りの人たちに教えていたでしょう。同調する者はたくさんいたはずですが、でも実際に群れの中にそういうことに対して罪悪感をぬぐい切れないでいる者たちがいたのです。ですからパウロはここで弱いクリスチャンの信仰の歩みを妨げるのを避けなさいと言うのです。9節「ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。」の「つまずき」というのは歩んでいる人が蹴躓いて歩行の妨げとなるものであったり、前進を妨げる障害物の話です。だから彼らが信仰者として歩んでいく、その障害物を置いてはいけない、成長の邪魔をしてはいけないと。

そしてその上で10節にこうあります。「知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、それによって力を得て、その人の良心は弱いのに、偶像の神にささげた肉を食べるようなことにならないでしょうか。」と。霊的に成長しているという者たちが偶像の宮で食事しているのを特に信仰的に弱い人たちが見たら、また実際に食べてもいいのだという確信を持っていない人たちが見たら、こういった問題が起こると言うのです。「それによって力を得」と書いてあります。つまり、あの人たちがしているのなら自分もしてもいいのだと思うことです。その結果どうなるかということ、その人の良心は弱いのに偶像の神にささげた肉を食べるようにならないか。つまり正直言ってまだ良心が抵抗しているにもかかわらず、聖書的な確信を持っていないにもかかわらず、あんな立派な信仰者がしているのだからと言って懐疑心を持ちながら食べることにしないかとパウロは言うのです。

その結果がどうなるかが11節に出てきます。「その弱い人は、あなたの知識によって、滅びることになるのです。」、もちろんこの「滅びる」というのは永遠の滅びのことではありません。このことばは1コリント1:18にも出てくるのですが、そのことばはそこでは永遠の滅びとして使われていました。でもここではそうではありません。ここでは、罪を犯すことになるという意味で使われています。なぜかという、その信仰的に弱い人、救いにあずかったばかりの人は、まだこういう行為をしてはだめなのだと思っているのです。それをするのは罪なのだと思っているのです。その罪だと思っていることをすることは罪だと言っているのです。パウロがローマ14:23で「しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。」と言っています。自分の中でそれは間違っていると思いながらそれをするのは罪だと言うのです。ですから信仰的なあなたは、信仰的に弱い人にみことばを教え、聖書を教え、その人が心からの確信を得るまで強要するのではなくて待ってあげなさいとパウロは言うのです。それまでは彼らの良心を踏みにじってはならないのだと。

また、当然群れの中におられる信仰的に弱いあなたに言えることは、しっかりと聖書を学んで成長していくことです。そしてあなたの良心が責めるのであれば、してはいけないということです。信仰に反することをすれば罪だからです。しっかりとみことばを学び、そのみことばを実践することによって成長していきます。そうすると、これが神に喜ばれることなのだという確信を持って行動していくことができる。それが必要だと言うのです。だから、教会の中で若い人たちは信仰が成長するように努めていくべきですし、成長している者たちはしっかり彼らのことを配慮して、彼らのことをわかってあげなさいと。

この11節でパウロは、本来は弱い信仰者の成長を助けるはずの霊的な人、信仰的な大人である人は、成長を助けることなくかえって彼らの成長の妨げとなっていること、その問題を指摘するのです。ですからパウロはその警告を11節後半にこう記しています「キリストはその兄弟のためにも死んでくださったのです。」と。確かにまだ信仰的に弱くていろいろなことが判断できないでいる人がいるでしょう。そのような人でも主がご自身のいのちをもって贖われた人なのだとパウロは言うのです。主が愛する存在なのだと。ですからそのような人のつまずきになることは罪なのだと。

12節「あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を踏みにじるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。」とあります。確かに大変厳しいメッセージが記されています。兄弟たちにつまずきを与えるのであれば、それは罪を犯すことだと。なぜそうなるのかということ、キリストにある兄弟が罪を犯すきっかけを作るからだ。しかもパウロはその罪はキリストに対する罪だと言います。主が愛しておられる兄弟が罪を犯すようにと惑わすことは、主が悲しまれることであり、まさに主に対する罪なのだと。ですから信仰の成長した人たちよ、信仰的に大人である皆さん、そういう弱い人に対する配慮を忘れてはいけないとパウロは言います。彼らに対してどんな模範を示そうとしているのか——。彼らがみずからの良心に反するようなことをするきっかけを作ってはならない、つまずきを与えてはいけないのだと。

そのことを踏まえて、パウロは13節に自分の結論を記します。「ですから、もし食物が私の兄弟をつ

まずかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。」と。パウロは肉を食べることが罪ではないと知っているのです。食べてもいいのです。しかしその行為が兄弟の徳を高める、信仰を高めるのではなくて、かえってつまずきとなるのであれば、私はそれをしないと。大切なガイドラインですよ。何をしても構わないから何をしてもいいのか——。信仰者であれば、周りの人たちのことを考えなさい。彼らが罪だと思ふようなことをもしあなたがしているのであれば、実際にそれが罪でなかったとしても、そのように思っている人たちがいて、その人たちがあなたの行いをまねてしまうようなことになるのだしたら、つまずきを与えてしまっているのだと。確かにパウロはⅠコリント10：23で「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。」と書いています。だから私たちは有益なことを、徳を高めることを行う必要があるということです。私たちが兄弟の信仰の成長に役立たないことを行うのであれば、私たちが覚えておかなければいけないのは、それは私たちが一番喜ばせたいと思っている神を悲しませることになるということです。パウロはそのことを知っていたのです。ですから神様が喜んでくださるためだったら、自分の自由の権利を喜んで放棄しよう。自分のしたいことをするために生きているのではない。神様を喜ばせるために生きているのだ。そうすると群れにあって、信仰の先輩は後輩たちをしっかりと育てていく責任があると。それは聖書の学びをするということだけではない。我々の生活を通して彼らにつまずきを与えないことだと。だから私たちのその歩みがそれを見ている者たちに、こんなふう生きて行ったら神を喜ばせることになるのだ、こういうふう歩んだら神様喜ばれるのだと、そのような模範を示しているかどうかということが含まれているのです。

ローマ14章をお開きください。まさに今我々が学んできたことをパウロはここに記してくれています。長いのですが、言わんとすることがすべて記されているのでご一緒に見てください。

#### ローマ14：1－23

- ：1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。
- ：2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。
- ：3 食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。
- ：4 あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。
- ：5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。
- ：6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。
- ：7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。
- ：8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。
- ：9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。
- ：10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。
- ：11 次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」
- ：12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。
- ：13 ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。
- ：14 主イエスにあって、私を知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたもののなのです。
- ：15 もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物の中で、減ぼさないでください。
- ：16 ですから、あなたがたが良いとしている事がらによって、そしられないようにしなさい。
- ：17 なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。
- ：18 このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々にも認められるのです。
- ：19 そういふわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。
- ：20 食べ物の中で神のみわざを破壊してはいけません。すべての物はきよいのです。しかし、それを食べて人につまずきを与えるような人のばあいは、悪いのです。

- :21 肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまずきになることをしないのは良いことなのです。
- :22 あなたの持っている信仰は、神の御前でそれを自分の信仰として保ちなさい。自分が、良いと認めていることによって、さばかれない人は幸福です。
- :23 しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。

## 結 論

まさにこの手紙の中に記されていることを私たちは今、コリントの手紙の中で見たのです。ですから結論です。食べ物に関して言うならば、確かに我々は何を食べてもいいという自由があるのです。ただその権利も「愛」をもって行使しなければならないということです。信仰において幼い兄弟たちにつまずきを与えることがあってはならない。もしそうであるならばそれは罪です。かえって「愛」をもってお互いの信仰が成長するように助け合い、そして励まし合っていきなさいと。我々信仰者は何かをする時に、私がしたいから私の勝手でしょうではなくて、私たちは愛する兄弟姉妹たちの成長のためにすべてのことをなすことが必要です。神を愛する者は神によって生まれた者を愛するのです。群れの中にある、信仰者ひとりひとりが考えるべきことは、私の行うすべてのことの動機が「愛」に基づいているのかどうかということです。私たちは自分たちのやりたいことをするのではない。たとえその権利を持っていたとしても、私たちは人々を愛するゆえに、兄弟姉妹を愛するゆえに、彼らの徳となることを行っていきなさいと。それがこの偶像にささげた肉を食べていいのかどうかという質問に対するパウロの答えです。自由をいただいた私たち、その自由を賢く用いて兄弟姉妹の信仰の徳になるようにと歩んでいきなさいとみことばは教えます。どうか神の助けをいただきながら、そのみことばの実践をこの1週間もなしていきましょう。